

初春と鈴の音

下野市教育委員会 生涯学習文化課

始春の初子のけふの玉箒手にとるからにゆらく玉の緒大伴家持（巻二〇―四四九三）（意味）初春の初子の今日、玉箒を手にとると玉が付いている紐が揺れてカラカラ玉の音が鳴る。この情景から玉箒を揺らすと魂が活性化し邪気を祓うと考えられ、揺れる玉の付いた紐とともに命も清らかに揺らぎ、新しい息吹の春を迎えると考えられました。

ちなみに本市の別処山古墳出土銀装大刀も柄のところ为空洞になっており、その中に鈴が一つ入っていました。また、柄の中央には直径七ミリメートル前後の穴が開いており、そこには五色の紐が付いていたように考えられます。また、一緒に出土した三鈴鏡は直径七センチメートルの鏡の縁に鈴が三個付いています。造られた時は、新品の十円硬貨のような色だったと考えられます。栃木県内では例がありませんが、鈴は時折奈良時代の堅穴住居跡からも出土します。全国でも数例となりますが、古墳のほか、庶民が住んだ堅穴住居跡からも出土しています。

今でも鈴が綺麗な紐と一緒に守りなどに付けられているのを見かけると、万葉の時代よりも古

い古墳時代の考え方、魂が揺れる＝活性化＝再生＝パワーアップ＝邪気を払うという考えのような原体験的な風習が残っているような気がします。

また、この玉箒と同様のものが、伝存するものが、奈良市東大寺の正倉院に保管されています。

この箒と共に「子日目利箒」と呼ばれる儀式用の箒です。現在の我々には儀式に箒？と思いますが、この箒は孝謙天皇が、一年の初めの「子」の日に

養蚕用の棚を掃き清めるための箒でした。玉箒は、目利草やキク科のコウヤボウキの茎を束ねて、

黄・緑のガラス玉で飾ったものです。各重臣たちも天皇から玉飾りの付いた箒を拝領したと考えられています。これは農桑を当時奨励しており、絹

の機織が盛んに行われていたと考えられます。甲塚古墳出土の機織形埴輪は、この頃からさらに約

二百年ほどさかのぼった時期のもので、最新型の機械は珍しかった時期のものかもしれません。

これと一緒に正倉院に収納されているのが「子日手辛鋤」で、この鋤は天皇自らが年の始めの「子」の日に田起こしをする際の儀式に使用したと考えられており、聖武天皇が儀式の中で、田

起こしを行った際に使用したものと考えられています。

※目利草：マメ科の多年草

ます。この「初子の日」の宮廷行事は、中国の周や漢の時代に起源を持ち、宴会は、唐の太宗の貞観年間（六二七―六四九）に始められたと考えられています。

大伴家持がこの歌を詠んだのは天平宝字二年（七五八）の正月三日でした。この時、

右中弁大伴宿禰家持は「大藏の政のため、奏し堪えず。」とあり、大藏省の勤務のため、天皇に奏上できなかったとあります。家持の職階の右中

弁は、正五位上相当の高官ですが、上から数えると4番目位であり、後に松の内とされる三が日も勤務日だったようです。元日の午前中に行われる

朝廷の重要儀式である朝賀の儀（天皇が大極殿に出御しお祝いを述べる行事）にはまさか参列した

のでしょうか？昼からは各省庁、国府などの地方行政体でも郡司たちが国司の元に集まり、儀式を

行い午後から宴会が開かれました。この時、配られるお酒の量も役所の階級によって量が異なりま

した。家持さんは、日直だったのでしょか？

※目利草：マメ科の多年草

